

「渴きの病」の治療法

上うえ廣ひろ榮えい治じ

「秋渴き」という言葉があるそうです。もともと、最近では辞書からも姿を消しつつあるようですが、その意味するところは、秋に食欲が増進すること。つまり、夏の暑さに食欲も減退していた人が、涼しくなるとともに食欲が増し、まるで飢えたようになることだそうです。

たしかに秋は食が進みます。しかも、美味しいものがたくさん出回る季節です。松茸まつたけ、秋茄子あきなす、秋刀魚さんま、秋鯖あきさば、それに鯛いわしや鮭さけも秋が旬です。しかし、美味しいからといって「秋渴き」にまかせて食べ過ぎると、いっしょに「渴きの病」に取りつかれるかもしれません。この病は食べても食べてもまだ食べたくて、腹が破れるまで食べてしまうという、それは恐ろしい病です。ご飯をしゃもじで直接食べると、この病にかかるという伝えている地方もあるそうです。

「秋渴き」という言葉から、「渴きの病」へと連想が広がったとき、なにやら近年の日本人がみな、この渴きの病に取りつかれているのではないかと思われてきたのです。

少年時代に戦後の混乱期を体験した私の世代は、戦後二十年を経た頃には、本当に豊かになったと、つくづく実感したものでした。所得は倍増し、何であれ必要なものはほとんど出回って、ぜいたくさえ言わなければ、衣食住が満たされるようになったのです。誰もが「日本も、とうとう、ここまで来ることができた」と感じていました。

しかし今にして思えば、あの時代が渴きの病の始まりだったのです。秋の美味しいものが次々と出回るのと同じように、手に入れても手に入れても、尽きることなく登場する「欲しいもの」に振り回されて、「本当に大切なもの」を見失う、そんな時代が始まったのです。

渴きの病はそれから長く続きます。バブル期に最高潮に達して、その崩壊で一時期沈静化したかに見えましたが、ちょっと景気が回復しはじめると、早くもセレブだヒルズだと騒ぎはじめる始末です。病は少しも治ってはいなかったのです。私たちは今もなお、渴きの病に取りつかれて、右往左往しているのです。

自分は病にかかっていないというあなたも、ご自分の回りを見回してみてください。「不用品物がどれだけあるか」ではなく、「家に無くてはならない物はどれとどれか」と、ちょっと考えてみてください。きつと、無くてはすんだ無駄な物がたくさん発見されるに違いありません。

しかし、いざ思い立って不用品を整理しようとする、これがなかなか捨て難いものなのです。なぜなら、本人が渴きの病に取りつかれているからです。そこで、不用品を非情に整理し処分してくれる仕事人までするそうです。そうしたプロの手にかかると、家の有効スペースはたちまち倍増するといえます。

では、私たちは渴きの病にかかったことで、いったい何を見失ったのでしょうか。この病の絶頂期、一九九〇年前後の流行語を見ると、私たちが見失っていたものが、はっきりと見て取れます。

バブル末期の流行語とは、こんな言葉です。長い髪を「ワンレン」に切り揃えた女性たちが、体にびった

り張りついた「ボディコン」の服を着て、お立ち台で踊っていたディスコが「ジュリアナ」や「マハラジャ」。女性の送り迎えをするだけの「アッシー君」に、食事を奢るだけの「メッシー君」。プレゼントしてくれる「ミツグ君」もいました。女性に人気があるのが青年実業家という虚業家「ヤンエグ」と、高身長・高學歷・高収入の「三高」。競馬やゴルフをやって、赤提灯でおだをあげるキャリアアウーマンが「オヤジギャル」で、「地上げ屋」が横行闊歩し、「億ション」がもてはやされたのでした。

こう並べてみると、これらの言葉には、生活感というものがいっさいありません。物欲と浪費、安易な享樂といかがわしい高収入者が賛美されて、堅実な生活が軽蔑されているのです。つまり、人々は仕合わせを支える基本であるはずの、地に足の着いた生活を見失っていたのです。

手に入れたもので満足できない。もつともつとと食る病は、確実に人々の意識を浮薄なものに変えていき、生活の根幹である家庭を顧みる心も失っていたのです。例えば、離婚に対する考え方も一九九〇年を境に激変しています。

世界十か国の大学の協力で行なわれてきた価値観調査によると、一九九〇年には、離婚はよくない、容認できないと答えた人が五八パーセント、容認できるとした人が三二パーセントでした。ところがその後、急速に離婚を認める人が増え、離婚は正しくないと思う人が減っていくのです。そして二〇〇五年には、容認できないが三二パーセントに対して、正しい、容認できるが六〇パーセントと、十五年前とちょうど逆転した結果になっています。

私はこれもまた渴きの病の症状だとみています。結婚とは、夫婦が力を合わせて、仕合わせな家庭を築いていくことです。喜びも悲しみも家庭を軸にして旋回していきます。ときには感情の行き違いや意見の違いが出てくるかもしれませんが。しかしそれは、自らを省み、相手のことを思いやることで、容易に乗り越えら

れる問題です。夫婦が愛和の固い絆で結ばれていれば、喜びは二倍にも三倍にもなり、どんな悲しみも癒されることでしょう。

しかし、離婚もよしとしている人たちは、結婚も人生の買い物ぐらいにしか考えていないのです。結婚してみて「自分の意に沿わなければ」、あるいは「愛がさめたら」、あるいは「もったいい人が現われたなら」、すぐにでも離婚するほうが「正しい」と考えるのです。返品して、よりいいものを買換えればいいと考えているのでしょうか。

しかし、いったい誰にとって正しいのかといえ、渴きの病にとって正しいのです。身勝手な自分にとって正しいのです。ただし、両親に絶対の信をおいている子どもは、自らの欲望を満たすために家庭を壊す親によって、鋭く引き裂かれるに違いないのです。それは絶対に正しいことではないのです。

この渴きの病は、個人に顕れるだけでなく、国や社会の集団にもみられる人間の業病ごうびょうかもしれません。一定の豊かさを手にとると、さらなる富を求めて他者を滅ぼしにかかる例は、過去の歴史において枚挙に暇がありませんし、今も世界のいたるところで渴きの病が猛威をふるっているのです。

では、どのようにしたら、その病にかからずにするのでしょうか。病の進行を止められるのでしょうか。その鍵は六十周年の記念式典でもお話しした利己心の克服にあると考えます。世のため人のために害をなす欲望や、家庭愛和を乱す欲望は断固としてこれを認めてはならない、という線引きです。

あれが欲しい、これが欲しい、ああしたい、こうしたい。どんな望みであれ、それが世のため人のためになる欲望なら、あるいは家族を喜ばせる望みであれば、果敢に獲得すればよいのです。しかし、そうでなければ、それを手にしたところで何の意味があるのでしょうか。私たちが生きる意味とは、家族を守り、世のため人のために尽くすことなのですから。